

## 書評

池上 俊一

### 『ヨーロッパ中世の想像界』

(名古屋大学出版会、二〇二〇年)

ヒロ・ヒライ

本書は、射程や手法を説明する序章(四六頁)につづいて、四部構成の本体(六八六頁)、そして終章(五二頁)、さらに注(四七頁)や参考文献(八〇頁)、最後に人名索引と史料索引が付され、全体として約九五五頁という浩瀚な一冊となっている。以下では、著者自身の言葉にそって本書の概要を紹介したのちに、評者の所感をつづてみたい。

「想像界の歴史学」と題された序章は、「想像界へのアプローチ」「驚異の役割」「本書の概要」の三節からなる。冒頭で、中世ヨーロッパにおける「想像界」(イマジネール *imaginare*)の全体像を、その歴史的な変容とともに解明することが本書の目的だと宣言される。さらに踏みこん

で、想像界の「全体構造」を解明することが目標だともされる。著者によれば、イマジネールという「媒質」の特徴を理解することなしに、中世ヨーロッパ人の思考の理由も行為の意味も理解できないという。

「想像界へのアプローチ」と題された節では、まず「想像」の働きが説明される。著者の先行作品『ロマネスク世界論』(名古屋大学出版会、一九九九年)では「思考」「感情」「感覚」「想像」の四要素から「心性」が分析されたが、本書では想像の働きに焦点がかわられる。感覚をとおして外界から受容したメッセージを身体的な諸条件から離れて自由に料理しながら、想像は現在を過去や未来とつなげるという。過去だけに関与する「記憶」と異なり、想像は未来にも関与するのだ。想像の担い手が「イメージ」であり、意識下・無意識の表象が意識のレヴェルに現出したもので、固有の機能と構造をもつとされる。イメージには、思考や身体と独立して非現実世界を構築する力があり、中世ヨーロッパの思想や文化においては、象徴であれ、寓意であれ、イメージを介して思考が導かれたという。

「想像界」は「イメージ世界」とも換言され、とくに中世ヨーロッパのそれは意識と無意識、あるいは知と非知のあいだに存在し、不可視なものに具体的な輪郭を与えて思考と行動を導いた創造的な世界だったとされる。そこには

予言的な次元も含まれている。中世ヨーロッパに充満する想像界は、知的・権力的なエリート層だけによってつくられたのではなく、一般民衆も参加していたという。

著者によれば、伝統的な意味での「イマジネーション」（想像力・創作力）とは異なり、「ある社会を集合的に動かして考えるイメージ群の創造と使用の歴史」が想像界をつくり、変容させていくという。こうしたイメージ群を構成する各イメージは孤立しておらず、全体のネットワークに結びつけられ、周囲にあるイメージを感化しながら総体として変化し成長する。各イメージは想像界の全体構造のなかではじめて十分に解釈されるが、各イメージがもつ意味の変化も歴史的な文脈におかないと理解されないという。

こうした議論につづいて、著者はヨーロッパの中世が「イマジネールの時代」だったと断言する。ほかの時空間に見出せないほど強力にイメージが作用していたがゆえに、古代末期のキリスト教父から初期近代の宗教改革者まで、イメージの意味や役割について際限ない議論が重ねられたのだという。こうした膨大なイメージ群の分析を眼前にして、著者はみずからもつ危惧を読者に吐露している——「じつに多様で多彩なイメージたちが乱舞し、とりとめもなく解釈されているように思われるかも知れない」。そしてこの危惧にたいして、「本書には一貫した構想があり、すべて

は全体構造との関連のもとに解釈されている」と応えている。

「文学・図像・伝説・夢」と題された節では、分析の対象となる史料、つまりイメージを伝える「媒体」（メディア）が議論され、「文学作品」「美術作品」「伝説」とならんで、「夢」がもつとも重要なものとされる。中世ヨーロッパでは、夢は現実世界の事象を暗示・予知するだけではなく、神や死者、悪魔からのメッセージでもあり、想像界の源泉でもあった。とくに中世人の夢は自己の内面から表出するだけではなく、外部の異界や超自然の存在からやってくるという。突然の訪問者としての夢は警告や脅迫であり、激励や予告でもあったし、白昼夢としての「幻視」も同様に重要視された。

つづいて「研究史」と題された節では、中世ヨーロッパの想像界についての研究がフランスのアナール学派によって牽引されたとされる。とくに一九七〇年代から同派が刷新した領域には、民俗（民族）学的な歴史学と歴史人類学とならんで、「イマジネールの歴史学」があったという。それに先立つ六〇年代にアナール学派の「心性史」が隆盛すると、先駆的な業績としてマルク・ブロックの『王の奇跡』（一九二四年）が脚光をあび、その再評価とともに人類学や民俗学の成果を活用して「イマジネールの歴史学」を打

ちたてたのがジャック・ルゴフだったとされる。

思想史に近いイメージ研究として、スコラ学者の著作に見出せる「自然」や「靈魂」といった「觀念」（アイデア）の変遷をとりあつかう「觀念史」にも言及されるが、著者による特別な思い入れは表明されない。中世ヨーロッパについてのインテレクチュアル・ヒストリー研究で、近年もつとも生産的・創造的な『ミクロログス』の運動への言及はあるが、注や文献表から鑑みるに強いコミットメントは感じられない。

以上の議論につづいて、中世ヨーロッパの想像界についての研究で、もつとも重要なテーマだと考えられる「驚異」について特別な節が設けられている。著者によれば、「驚異は詩的な生け簀であり、シンボルの貯蔵庫で、中世のイメージは世俗化しながら、そこに自らの再生・刷新に必要な資源を見出した」という。中世ヨーロッパは、驚異にとりつかれた時空間であり、そうした驚異の大半は通常の世界・自然にある要素の拡張や歪曲、強調、混沌・結合でなりたっているとされる。驚異は受容者の驚きを誘発すること、「感情」の世界と「思考」の世界を結びつける太いパイプとなり、想像を賦活するのだ。驚異の世界は異質だが、現実の日常世界とかけ離れた別世界ではなく、相互に浸透しあい、つながっていると信じられた。神の業で

人間の眼前に提示され、常識では信じがたい現象が「驚異」なのであり、キリスト教に背馳しないとされている点が重要となる。あくまで自然の現象であり、奇跡や魔術とは異なっていたのだという。

「本書の概要」と題された節では、中世ヨーロッパの想像界の全体構造をイメージの意味や役割の変化、イメージ同士の連環をとおして説明し、中世ヨーロッパを再考することが本書の目標だと宣言される。とくに想像界の「構造」を説明することが至上命題となる。

以上の「理論編」を踏まえて、「実践編」にあたる本体の二〇章にわたる分析が展開される。以下では紙幅の関係から各章の踏みこんだ考察はできないが、あつかわれるテーマ群だけ駆け足でみていこう。

第一部「植物・動物・人間」は、「薬効の在処」「庭園の変容」「鸚鵡とカラス」「動物観と動物イメージの変遷」「魂の姿」と題された五章からなり、それぞれのテーマの超自然世界との関係、キリスト教文化や宮廷文化における意味づけが分析される。

第二部「四大から宇宙へ」は、四大元素のそれぞれから導かれるイメージ群からテーマが選ばれ、「土：母なる大地」「水：水浴と温泉」「火：神秘と怪異の光」「風：翼に乗って」という四章につづいて、「宇宙と世界の形状」の章で宇宙像・

世界像が考察される。

第三部「聖と魔」では、「天使の訪れ」「聖心崇拜」「魔術師ウエルギリウス」「魔女の先駆け」「魔女のダンスとサバトの成立」という五章をおして、多様なイメージの源泉となった超自然的な力が「聖性」と「魔性」の二軸から検討される。

第四部「仲間と他者、現世と異界」では、「権力と権威」「友愛の印」「ユダヤ人相書」「糸巻き棒論」という四章をおして、権力秩序や身分制、仲間と他者、差別の正当化、ジェンダーをめぐるイメージ群があつかわれる。最後に「地上の楽園と煉獄」と題された章で、ユートピアとしての「地上の楽園」とデイストピアとしての「煉獄」が議論される。

二〇章による分析のあと、最終章「想像界の構造とその変容」では、「異教とキリスト教」「超自然界と聖性・魔性」「自然・宇宙と身体」「空間と時間」「社会の外と内」「想像界のダイナミズム」という観点から中世ヨーロッパの想像界の全体構造が考察される。著者によれば、イメージは心的世界を茫洋と漂って掴みたい印象をあたえるが、それを動かし相互に関係づける「論理」と「様式」が存在し、それらを束ねる想像界全体はある種の「構造」をもっているという。

第一の観点「異教とキリスト教」では、キリスト教世界

である中世ヨーロッパには、古代から存在した異教的な迷信が変容しつつ残存したとされる。キリスト教と異教の交錯によって幾つものイメージが誕生し、一般信徒にとっても重要な意味を持つことになった。教会は自然物の崇拜、野性味にみちた祝祭やダンス、呪術や迷信行為、占いを問題視し、ギリシア・ローマやゲルマンの神々を「悪魔」や「悪霊」と見做し、異教の神々の業を信じる者は悪魔に幻惑されていると考えたという。しかしケルト的な幻想性は盛期中世以降に文学空間内で増殖し、叙事詩的な記憶が集合的に伝えられていた騎士たちのあいだで武勲詩や古代ものロマンに結実する。

第二の観点「超自然界と聖性・魔性」によれば、超自然界のイメージは想像界という座標の「垂直軸」をなし、根本要素として古代教父の時代から盛期中世まで存続する。天国のイメージには劇的な変化はなく、地獄の特徴と地理が定まるのはトマス・アクイナスとダンテの時代だったのにたいして、魂の浄化の場としての「煉獄」のイメージは一三世紀後半に完成した。妖精のような聖性と魔性の中間的な超自然も存在し、神や悪魔の介入を必要としない、自然の枠組みでの超常現象とみなされたという。一二世紀に文学テクストに登場する妖精は、一三世紀には悪霊とみなされるようになり、魔女現象へと雪崩れこむとされる。

第三の観点「自然・宇宙と身体」によると、ロマネスク期は自然の発見期であり、女神ナトゥーラが神の補助者として機能した一方で、ゴシック期には自然は理性と観察のみで理解されるとされ、機械時計や風車といった人工物に喩えられたという。

第四の観点「空間と時間」によれば、空間と時間は中世ヨーロッパにおける想像界の「水平軸」であり、空間については秩序と平和にみちたキリスト教世界が中心にあり、その外部に異教の混乱した野蛮な世界が広がると信じられていたという。

第五の観点「社会の外と内」によると、中世ヨーロッパ人は「仲間」と「他者」をたえず区別していたという。血縁関係が重要で、それ以外の緊密な仲間が疑似的な「家族」のかたちを採用し、相互扶助組織である兄弟会では、成員が身分職業の区別なく「兄弟」になったとされる。こうして中世以降のヨーロッパ人は、さまざまな位相で「他者」を生みだしながら、自身のアイデンティティを形成していったのだ。

最終節の「想像界のダイナミズム」では、上記の諸観点から指摘された相互関係の構造が生み出す意味や価値の変遷が考察される。初期中世には貧弱であった想像界は、盛期中世・後期中世には大きな飛翔をみせ、とくに盛期中世

にはエリート文化とならんで民衆文化が発展して想像界を豊かにしたという。中世ヨーロッパは想像界が歴史を大きく動かした、世界史上でも稀有な時空間だとされる。一見して掴みどころのない想像界も、一連の精査により、ヨーロッパの個性が顕現していることが判明し、それは近代まで存続して新たな歴史を刻んでいく。

「あとがき」によると、中世ヨーロッパは「心性」のなかでも霊性と想像という働きが異様な成長をとげた時代だという。ここで著者は、時代区分や社会構造にそった分析を意識しながらも、それらを表だって適用できなかったと告白している。そして厳格な概念や図式にはまりきらないのは、歴史学として想像界を分析するうえでの宿命だと結論づける。そして最後に、一九六〇年代から八〇年代に一世を風靡した社会史や心性史が活気を失ってしまったことを嘆きつつ、これらの領域こそが歴史学の神髄であると確信し、グローバル化に象徴される世界情勢の変化によって、本格的な開花前に萎んでしまったのだと分析している。同様な心情が吐露される序章でも、華やかだった「社会史ブーム」が去り、その重要な一部だった「イマジネールの歴史学」が衰えてしまったことを嘆き、この運動の牽引者だったジャック・ルゴフを惜別している。

以下では、評者の所感を述べたい。編集者が見つけたであ

ろう帯文の表現「イマジネール大全」が示すとおり、千頁近くにおよぶ浩瀚な本書は、中世ヨーロッパにおける多彩なイメージについての百科全書となっている。こうした書物には不可欠だと思われる事項索引は付されておらず、読者たちには優れた記憶力と情報解析能力が期待されている。

各章で提起される問題設定について作業仮説を立て、史料を使いながら論証を積みあげつつ、アーギュメントの正当性を証明するという今日の国際標準ともいえる手法をとる代わりに、各主題を分析する作業の連続から想像界の全体像とその構造を、「本書全体をとおして炙りだす」ことが狙われている。古き良きヨーロッパの学問伝統に見出されるスタイルを踏襲しているのだろう。

本書全体をとおして古代末期から初期近代の入り口までの変遷を時系列的に追いかける記述はとられず、テーマごとの類型学的な分析が採用されている。もちろん各テーマの分析においては、時代区分による変遷が記述される場合もあるが、それが一貫されているわけではない。時系列ではなく、主題ごとに類型分析がされることから、本書全体としては各項目で時代を行ったり来たりすることになり、一部の読者は混乱するかも知れない。

歴史家アルナルド・モミリアーノの名著『近代歴史叙述

の古典的な基礎』（勁草書房、近刊）で提唱されている歴史叙述の分類にしたがえば、類型学的な記述を重視する本書は、ヘロドトスやトウキユディエスが採用した方法ではなく、同じく古代ギリシアで興隆した、もうひとつの重要な潮流である尚古主義的（アンティクリアン）な方法の流れにあると考えることもできるだろう。モミリアーノによれば、尚古主義的な歴史叙述では、諸事項の類型学的な整理とともに、それらの事項のあいだの相互関係、つまり全体としての「構造」を見出すことにも力が注がれるという。著者が本書でくり返し強調する「想像界の全体構造」を解明する作業とは、まさしくこうした流れを反映しているものなのかも知れない。

本書の本体をなす二〇章では、文学や神学のテクストおよび芸術作品などの視覚史料から抽出されるデータが豊富かつ丁寧に提示されながら、各命題をめぐるイメージ群の分析が見事に展開されている（おそらく著者が得意とするテーマをあつかう）章も多い。なかでもジェンダーやマイノリティ、人種の問題をあつかう先進性は特筆に値する。その一方で、研究文献から得られる知見の整理に忙しく（それはそれで歴史学徒にとって有用だろう）、イメージの分析そのものからは離れてしまっている印象を与える章もある。これだけ多様なテーマをめぐるイメージ群の分析を一

個人でおこなうのだから当然なことなのかも知れない。こうした点を考慮すると、偉大な歴史家のライフワークの集大成ということで許されるのかも知れない千頁に近い紙幅は、真に妥当なものなのかという疑問も浮かぶ。なかには、五・五・五からなる二〇章という「アーキテクチャの美しさ」を尊ぶ読者もいるだろう。しかし各部が同数の章をもつ必然性は、本書のなかでは正当化されていない。関連する内容がつづく記述にもかかわらず、二行程度で段落が変わり、いたずらに紙幅が増えていく編集にも疑問符がつく。価格の観点からも、本書を気軽に入手できるのは、潤沢な公費をもつ研究者に限定されるのではないだろうか。記述を圧縮してエッセンスを煮詰めて結晶化させることで、より幅ひろい読者層にアピールする可能性を追求する方法もあっただろう。

(コロンビア大学・科学と社会研究所リサーチ

・アソシエイト)